

知的好奇心へと働きかけるミュージアムグッズができるまで

埋蔵文化財グッズの魅力

株式会社フェリシモ ミュージアム部 内村 彰

1 はじめに

私が代表をしている「ミュージアム部」というコミュニティは、株式会社フェリシモの部活制度「フェリシモ部活」のひとつです。ミュージアムが大好きなメンバーが集まり、ミュージアムをもっと楽しむための商品開発や、そこで体験したことを SNS で日々発信しています。

「フェリシモ部活」は「社内交流の一環」ではじまった取り組みで、共通の趣味や好きなものを持つ社員同士が時間を決めて集まり、仕事以外での交友関係を広げながら互いの個性や興味・関心を活かすことで自発性を促して仕事にもプラスの効果があればと考えて発足されたものです。

ミュージアム部もそのような「フェリシモ部活」制度のもと、日頃からミュージアムでの時間を楽しむ社員が集まり、2019 年から現在まで活動を続けています。

2 目指すところ

ミュージアム部が活動を通じて目指しているのは、お客さまにもっとミュージアムという場所を楽しんでもらうことです。そのために「知的好奇心をくすぐるグッズ」を開発しています。

ミュージアムは扱うジャンルも違えば規模もさまざまです。それぞれのキュレーションのもと作品や研究資料などを展示していますが、私たちはその多様な専門性に暮らしを豊かにするきっかけがあると気づきました。

お客さまにとってミュージアムがもっと身近なものになるように、展示物やその世界との出会い、ミュージアムでの過ごし方、後に語らうことができるような暮らし提案をしたいと考えています。

3 取り組みの内容

ミュージアム部の活動でメインとなるのは商品開発です。弊社のお客さまは美術・博物分野に興味を持たれている方もたくさんいらっしゃるので、ミュージアムを楽しまれている方の目線でさまざまな商品を開発しています。

例えば、ミュージアムで手軽に買えるお土産の使い方に悩みがあると感じた我々は、ポストカードを額縁ポケットにセットして楽しめる「マイミュージアムポーチ」。ミュージアム内で自分の足音が気になるというお悩みから、おしゃれなデザインの静音シューズ「音が響きにくい革風 T ストラップシューズ」などを開発。これらの商品は発売後、多くのメディアにも取り上げていただきました。

また、全国のミュージアムとコラボグッズを作ることもミュージアム部の大切な活動のひとつです。多くは公式サイトのお問い合わせフォームにご連絡いただくことでグッズ開発がスタートしますが、メンバーが特定のミュージアムと一緒にモノづくりをしてみたいと考えた際は、こちらからプレゼンテーションをすることもあります。

4 具体的な活用事例

実際にコラボしたグッズ開発の事例として埋蔵文化財と親和性のありそうな案件をご紹介します。ひとつ目は「大阪歴史博物館」と一緒に作った「鴟尾ポーチ&命婦礼服エコバッグ」です。

大阪の市街地に建つ「大阪歴史博物館」は、かつて難波京があったとされる場所に建つ歴史博物館です。大阪に都があったという事実に至るきっかけとなったのが、建築家 置塩章氏と考古学者の山根徳太郎氏が難波宮跡にて発見した「鴟尾の欠片」でした。欠片の発見により難波京の発掘が進んだということで、鴟尾が大阪歴史博物館の象徴的なモチーフであるのではないかと担当者にご提案し、グッズ化に至りました。



〈鴟尾ポーチ&命婦礼服エコバッグのポーチ部分解説〉

ふたつ目は「十日町市博物館」とのコラボグッズ「国宝火焰型土器 縄文雪炎クッションカバー」です。このコラボグッズは私がどうしても縄文土器の魅力をお客さまにお伝えしたいという理由で、直接ミュージアムにプレゼンテーションをさせていただきました。



〈十日町市博物館へのプレゼンテーション資料の一部〉

縄文土器のように実際に使用されながらここまでの装飾性がみられる器は、現代においてもそう多くはないでしょう。その独創性、神秘性に満ちた縄文土器の魅力を伝えたいと思い、「おこげ」跡も再現し、隆起線の美しさも見ていただける原寸スケールのグッズを作りたいとご提案しました。

無事グッズ製作の許可もいただき開発がスタートしたのですが、実際に進めてみると難関続きでした。まずは形状の問題です。グッズ開発前は図録に載っている一方向から撮影されている写真のみを見ていましたが、現物やご手配いただいた360度写真を見てみると、予想以上に複雑な形状になっていることがあらためて分かりました。

その複雑な形状を立体的に縫製で作る必要があるのですが、量産するために極力個性が出ない組み立て方を確立させる必要があります。そのためにまずミニサイズのペーパークラフトを製作しました。伸び縮みしない紙でパーツ組みすることで、構造に無理がないかを確認することができます。

形状に無理がないことが分かった後は、プリントするアート（隆起線模様）の検証をしますが、ここでも問題が発生しました。縫製するときのパーツの組み合わせと、プリントのずれが影響し、うまくアートが繋がらなかったのです。その結果もう一度はじめからアートの作り直しとなりました。



〈左：サンプル製作前にテストのために製作したペーパークラフト 右：模様が合わない事に気づいた1stサンプル〉

このように制作を進めるたびに新しい問題が見つかる状況でしたが、十日町市博物館のご担当である村山さま、館長の菅沼さまのご協力もあり、約1年の制作期間を経て完成することができました。



〈左：十日町市博物館蔵 国宝火焰型土器縄文雪炎、右：十日町市博物館蔵 国宝火焰型土器縄文雪炎クッションカバー〉

この商品の他にも、縄文土器ならではの模様注目できる立体的なハイゲージ編みで表現した「縄文土器ソックス」や土器が実際に“煮炊きする際に使われていた”という説を意識した「王冠型土器ランチバッグ（スープジャーバッグ）」「縄文雪炎スタッキングスープマグ」などを発売。ミュージアムショップ、フェリシモウェブサイトで発売後、SNSでも大きな反応がありました。



〈十日町市博物館コラボグッズ〉

このように、埋蔵文化財グッズの面白いところは、かつて人が住んでいたり使っていたりした物、いわゆる「暮らしの営みを感じる物」をもう一度日常の暮らしで使うものに作り替えるということだと思います。

5 おわりに

日常的に商品開発をしている私たちですが、ミュージアムグッズをつくることは特に難しい案件の一つだと感じています。その理由はモチーフとなる作品や研究対象のデザインに寄せる必要がある以上にミュージアムの想いとモノづくり側との想いを一つにしなければならないからです。

問題が起きるたび、ゴールは何だったか、本質からずれていないかを話し合い、想いを同じくして初めて良いグッズが生まれます。時間もかかり難しいですが、完成したグッズはいずれも世の中でたくさんの驚きをつくってきました。これからも多くの人々の知的好奇心をくすぐるミュージアムグッズを生み出していきたいと考えています。